



Title: 「ちょっと一服読み」のすすめ

いよいよ来週の火曜日（15日）から今年最後の開館日である27日（日）まで、大館市内4図書館の貸出冊数の上限が倍になります。本と雑誌が合わせて10冊まで、紙芝居が10巻まで借りられます。

そんなこと言われてもこの忙しい最中にそんなに本を読む暇なんかないよ、という方も多いでしょう。年末年始だもの、そりゃ忙しいですよ。あくまで上限なので、無理して10冊借りなきゃいけないというわけではありませんからね。読めるだけ、読みたいだけ借りてください。10冊では足りないという人は……よかったら4館ハシゴしてください。以前につくった、表面下部に各図書館名の入ったカードをお持ちの方も全館で利用できます。

❖本を読み進めるには

本を読んでいると、年齢のせいや性格のためなのか飽きてくることがあります。面白いんだけど、読むスピードが落ちてくる。眠いのかも。けど読んでいたい。そんな時の話です。

読んでいたのは、高野秀行・清水克行著『世界の辺境とハードボイルド室町時代』（集英社インターナショナル、2015年、中央図書館蔵）。タイトルはどうみても村上春樹の有名な小説のもじりですが、早稲田大学探検部出身のノンフィクション作家・高野秀行と、日本史（中世民衆史）を研究する清水克行の対談本で、これが面白い。室町時代というと、南北朝だとかなんだかよく分からない時代というイメージがありますが、それが室町時代の面白さ。しかし、今に続く日本の姿が立ち現れる時代でもあるということで、勉強になります。ゴチャゴチャした感じが今の（あるいは少し前の）東アフリカや東南アジアとそっくりだったりして、新たな中世の古文書発見の可能性がほとんどなくなっている日本史研究、特に民衆史研究において時間も場所も離れた両者の比較が大きなヒントを与えるものだと、興奮して語り合っている様がとても興味深いです。あくまで歴史の門外漢としての感想ですが。

それにしても高野さんて、結構本格的な学者的資質をお持ちの方だったんですね。アフリカで謎の生物を探したり、危険なソマリランドやアジアの麻薬栽培地域で暮らしたりするアブナイ冒険野郎かと思ってました。

どんなに面白くても途中でダレてくることはあるわけで、今回、ページが進まなくなると穂村弘の『によによっ記』（文藝春秋、2009、花矢図書館蔵）を拾い読み。これが良かったんですよ。脱力系の日記らしきもの（によっ記）を2・3ページ読むと、拭ったように頭がすっきりしました。そんなわけでメインの本と、何というか「おつまみ本」を9対1の割合で交互に読む読書に開眼した私です。複数の本を平行して読むのとは違うこのやり方を、「交互読み」または「ちょっと一服読み」と命名したいと思います。ちなみに穂村さんのによっ記シリーズは3冊出版されています。『によっ記』は比内図書館に、最新作の『によによによっ記』は中央図書館に所蔵あります。でも、これ以上「によ」が増えると、言うのも聞くのも辛くなるなあ。

❁年末恒例「レクイエム展示」

掃苔（そうたい）趣味という言葉をご存知ですか。わたしは今年の夏頃知りました。「お墓についたコケを掃き清める」から転じて、文人・有名人のお墓を訪ね歩く趣味のことです。モノやことばを知ると途端に次々目に入ってくるもので、中央図書館の新着図書に『文学者掃苔録図書館』（大塚英良著、原書房、2015年）が。文人墨客の墓や碑を紹介した類書は少なくありませんが、掃苔録というのが効いています。

中央図書館の12月恒例の展示は、その年に亡くなった方を偲ぶ「レクイエム展示」。小さなコーナーですが、11月までに亡くなった著者の本を展示しています。ぜひご覧ください。

前項で取り上げた穂村弘の『によっ記』シリーズで絶妙な挿絵を描いていた、イラストレーターのフジモトマサルさんも11月22日に亡くなりました。慢性骨髄性白血病、46歳という若すぎる死でした。12月4日には時代小説作家の杉本章子さんが死去。1989年の第100回直木賞作家です。満62歳という年齢も惜しまれます。杉本さんの著作は市内4館およびおとり号に計21作所蔵ありです。（陽）